土曜日

土曜日。休みの日は、いつもより朝寝坊できるささやかな楽しみがある。
また、今日は夫婦２人でサイクリングに行く予定である。

※育児期間中も２人の時間を大切にする夫婦が増加。

家族４人の朝食を終えたころに、いつも育児シッターをお願いしている大学生の河野が到着する。月に一、二度夫婦２人で出かけるのだが、そんなときは、家で育児シッターに子ども２人の面倒をみてもらうことにしている。

※育児シッターが普及。
※家庭教師などとならんで、大学生のアルバイトのひとつに。

「いつも２人でお出かけ、いいですねー。仲良くてうらやましいな。あとは任せてください。」
「3時間くらいして、お昼過ぎの１時半ごろには帰りますんで、よろしくお願いします。」
柔らかな日差しを浴びながら、風を切る。爽快。
木々の緑、空気の香り、そよ風に揺れる花びら、あらゆるものに春の優しさが漂っていた。

サイクリングは、２人にとって、単なる共通の趣味にとどまらず、特別な意味を持つ。

２人が出会ったのは、大学のサイクリングサークルだった。
このサークルでは、月に一度、サイクリングに出かけることになっていたのだが、目的地やコースの選定は、持ち回りで担当するルールだった。
１年生の夏、健太と美咲は、クジでたまたまペアになり、目的地とコースの設定を担当することになったのだが、それまで、お互い特に意識していなかった２人が急接近するきっかけになった。

その後、つきあい始めた２人は、やがて同棲を始めた。愛する人とずっと一緒にいたいから。しかし、同棲にはもうひとつ、奨学金とアルバイトで学費や生活費をまかなう２人にとって経済的、という理由もあった。

※少子化により大学の学費が低下。
※奨学金制度の拡充。
※高校卒業後、自立することが一般的に。
※同棲の増加。
※学生出産、学生結婚の増加。
※出産・育児に対する社会保障制度の拡充。

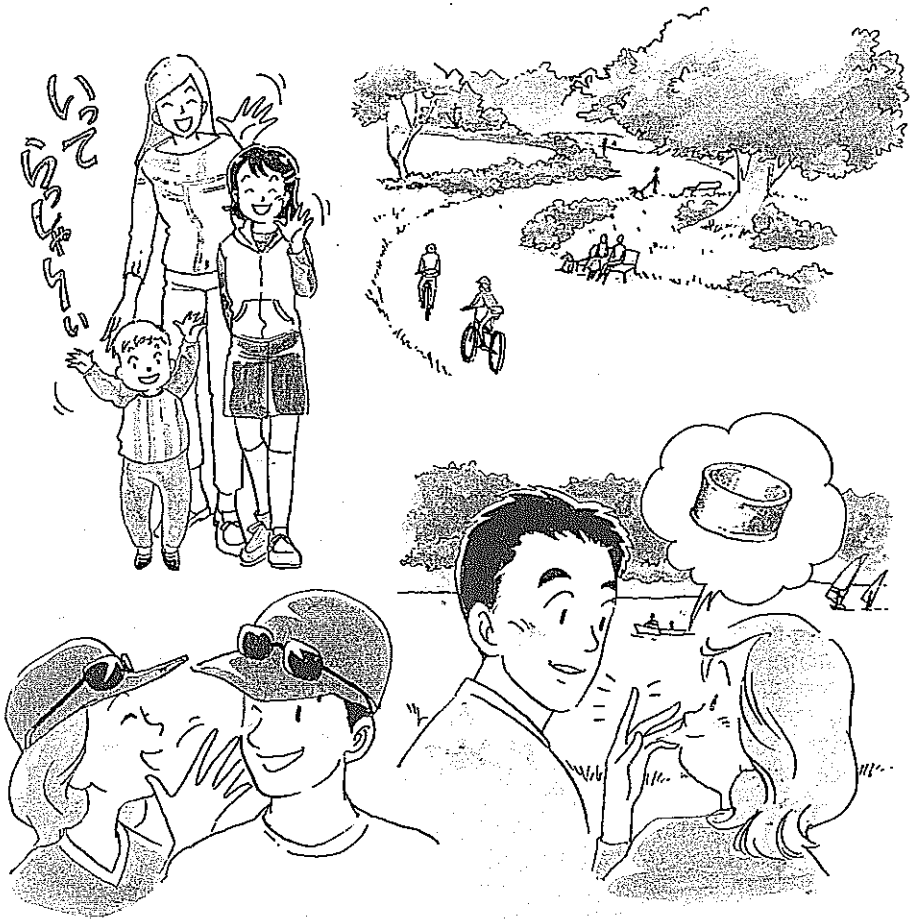
そして、大学３年のとき、来夢が誕生し、それを期に結婚した。
来夢の誕生は、経済的な影響が大きかったのは事実であるが、手当てなど社会保障を受けながら、美咲も健太も割のいいアルバイトを選んで何とか乗り切った。親からは援助の申し出もあったが、できるだけ２人でやっていきたかった。

学内には、福祉学部の研修の場を兼ねた託児ルームがあった。社会に出た後、子育てをしながら通う大学院生を主な対象にしていたが、学部生の２人も利用させてもらった。

※社会に出てからも大学や大学院で学ぶ社会人が増加し、大学にも託児施設。

２人は自転車を走らせながら、決して雄弁ではなかったが、２人でいることそれ自体を実感していた。それで十分であった。
郊外の小さな湖がある自然公園が、今日の２人の目的地だった。湖畔で自転車を降りると、２人は眼前に広がる風景をしばらく眺めた。
春風になびく髪を軽く押さえながら、ふと、美咲は健太の方に顔を向けた。

「ねえ、フルタイムに戻ったら、そのままずっと通すの？」
健太は意外な顔をした。
「そうだな、来夢の中学もあるし、広い家にも住み替えたいし、それに将来の独立のために、今よりもう少し貯金したいね。まあ、短時間勤務は、また子どもができれば別だけど・・・、んっ、どうしてそんなこと聞くのかと思ったけど、もしかして・・・。」
健太が微笑むと、美咲は、一呼吸おいて、少しおどけたように、
「マタニティ・リング、またほしいな。」
幸せそうな２人を包むように、ひときわ優しい風が通り抜けた。



日曜日

日曜午前９時半。健太はいつもより遅い朝食の準備をしている。休みの日は、料理の得意な美咲が夕食を担当し、健太は朝食当番。そういう約束。

※男女が家事を平等に分担。

美咲は皿やカップを準備した後、ソファーで新聞を読んでいる。
２人の子どもはまだ寝ている。

「さて、そろそろ起こしてくるか。」
健太は、自分に気合いを入れるように、少し大きな声でそう言うと、子ども部屋に向かう。
「おい、来夢、朝メシできてるぞお。」
来夢は、んんんとうなって、目をこすりながら布団から出る。

健太は登夢のそばにこっそりと忍び寄ると、布団をはがし、脇腹をくすぐった。
一瞬、きょとんとした登夢は、事態が飲み込めると、もがくように体をくねらせて笑い出した。
「この前のおかえしだー。」

今日は、「上田川クリーン作戦」に家族で出かける予定。
上田川は、地元を流れる川。20世紀の高度成長期に汚れてドブ川と呼ばれたこともあったが、21世紀初頭から清流を取り戻そうという運動が起こり、いままで四半世紀にわたって活動が続けられている。現在では、蛍が生息する清流に再生し、地域住民の憩いの場となっている。

※下水道等の普及、汚水処理技術の向上で、かつての清流が復活。

このクリーン作戦は、かつては、市役所の旗振りで行われていたが、今はボランティアの手に委ねられている。

※ボランティア活動の活発化。

のんびりと朝食を済ますと、サンドイッチを持ち、４人で川へ向かった。
正直にいうと、月に一度のクリーン作戦は、世の中のために、といった大それたボランティア精神から参加し始めたわけではなく、子どもと一緒に川で遊ぶことが主な目的だった。同じ考えの親が多いらしく、来夢も友達ができて楽しそうだし、登夢も興味津々で河原を冒険する。そういった意味では、気軽な気持ちで参加している。

※「親子で何かをする」ということを楽しむ習慣。気軽にボランティアという風潮。

「みなさんおはようございます。えー、今日は、この場所から、松橋、すぐそこに見える橋ですね。あそこまで、河原と水辺のゴミ拾いをしたいと思います。」
リーダー格の竹田という男が、手のひらをメガホン代わりにして、50名ほどのボランティアに今日の作業を説明する。大小のポケットがしつこいほど装備されたベストから、竹田がアウトドア派であり自然を愛していることがうかがわれる。
「えー、それでは、始めます。ゴミ袋はこちらにありますし、軍手は忘れた方用にいくつか用意してありますので、使ってください。がんばっていきましょう。」

特にいつまでに終わらなければならない、という決まりはないが、おおむね昼過ぎに終わり、解散。午後は川で遊ぶというのが、暗黙のルールになっていた。
美咲と来夢が河原組、健太と登夢が水辺組にそれぞれ分かれてゴミ拾いを始めた。

美咲と来夢は、手も動かすけど、口も動かす、といった感じで、近所の人たちや同級生とおしゃべりに興じながら、作業を進める。
時折、そおなのよ、えーほんとにい、といった断片的な言葉や笑い声が響く。

健太と登夢は、水辺の生き物を観察しながら、ゴミを拾う。といっても登夢はゴミを探しているというより、川の中の生物を観察している。

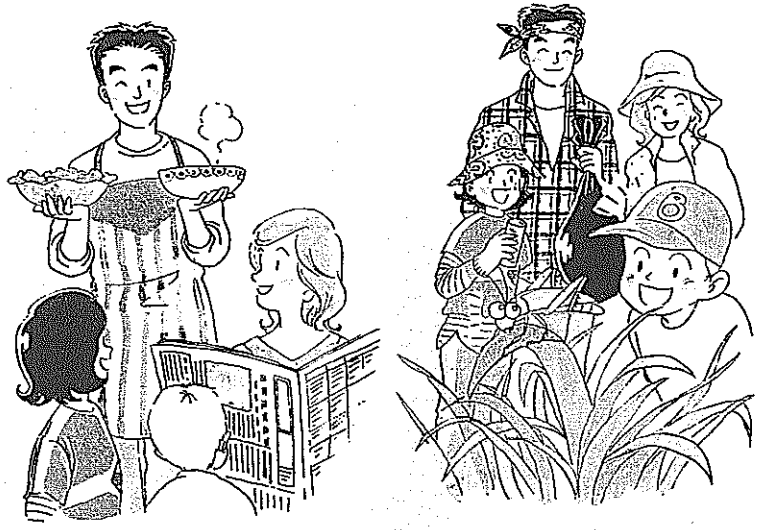
※親子で自然とふれあうことで教育的効果とともに、人間性の涵養に。

ザリガニを見つけた健太は、慎重にその背中をつまむと、登夢に見せる。ザリガニは、抵抗してハサミを開き、振りかぶる。
「ほら、登夢、ザリガニだよ。ほら。」
登夢は、うお、と言ってじっとザリガニを見つめると、
「ざにがに、がおーってしてるねっ。」
といって鼻息を荒くした。

集団で行動するとき、誰が決めたわけでもないのに、自然と取りまとめ役になる人が出てくるものだ。こうした人たちを中心にスムーズに作業は進んでいく。

午後１時を前に今日の作業が終わる。

「はい、みなさんお疲れさまでした。おかげさまできれいになりました。来月のクリーン作戦につきましては、上田川ボランティア・ネットのホームページに掲載しますので、よろしくお願いします。それでは、解散します。」
竹田の表情には、達成感が見て取れ、うっすらとにじむ汗が、きらと光った。



ビニールシートを広げ、河原で４人一緒に昼食をとる。
美咲と来夢は、今日仕入れた出口さんちの話やナナちゃんちの出来事を披露する。
健太は、それをふんふんと聞き、たまに相づちを打つ。
登夢は、自分に話を振られると答えるが、基本的には、さっき捕まえたザリガニがいるプラスチックの虫かごを見ている。美咲と来夢は、気持ち悪い、といやがったが、登夢はかなり気に入った様子。

※遠くまで足を伸ばさなくても、地元に自然があり、気軽に気分転換ができる。

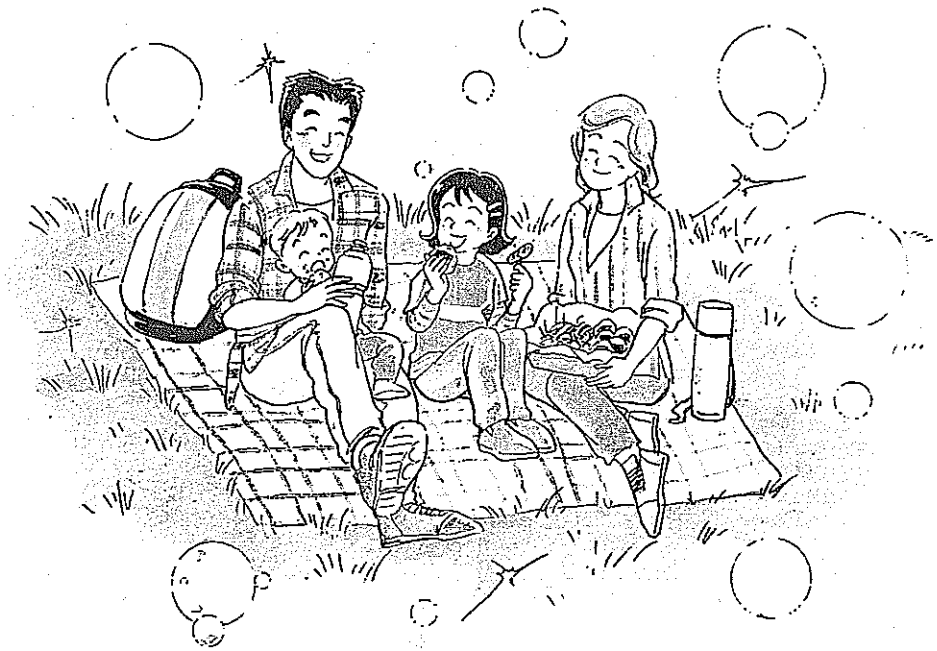
昼食が終わると、４人でフリスビーを始めた。
そのうち、健太は、疲れたよ、といって、ビニールシートに戻り横になる。

３人は、しばらくフリスビーを続けたが、登夢がうまくできなくて、不機嫌になってしまったので、中断し、河原を散歩し始めた。

横になった健太の頭には、仕事のことが浮かんでくるが、せっかくの休みだし、と自分に言い聞かせ、ゆっくりと流れる雲を見る。

今、健太と美咲の２人は、十分に子どもと接する時間を持っている。仕事は能力主義で楽ではないし、健太が短時間勤務の分、収入は減っているが、こうした日常をお金で買っていると思えば、安いものだ。
来夢は、最近、健太とちょっと距離を置き始めた。男親から見ると、女の子は難しい。そのうち煙たがられるのかな。
登夢は、興味を持ったら、周りが目に入らない。こだわりを持って仕事に取り組んでいる美咲のことを考えると、登夢は美咲に似たのかもしれない。
つらつらと思いを巡らせるうち、健太は眠りについた。

※家族のライフスタイルや価値観にあわせた働き方が可能。
※時間当たり賃金は、能力や成果を反映したものとなり、１日の勤務時間による違いはなくなる。

・・・。
人の気配を感じて、健太はうす目を開けた。
にいと笑いながら、登夢がすぐそばまで近寄っている。
また何かやらかす気だな。
健太は目を閉じ、気付かないふりをすることにした。

（完）